

ビードラゴン (bee dragon)

蜂竜と称されるこの生き物は、体長2メートルの捕食獣(イーター)。見た目はドラゴンのような頭部・コウモリのような翼・鋭い爪の生えた四本の足がありながら、昆虫のハチのような大きな尻尾を持つ。本来は腹部と呼ぶべきかも知れないが、これは尻尾である。

この尻尾の先には毒針がついており、獲物の口内に挿し込み毒液を大量に注入する。これは神経毒であり、数秒もすると獲物の身体は弛緩しだらりと強制脱力。激しく抵抗していても、すぐに動けなくなり獲物は尿道括約筋も弛緩し小便を垂れ流す。そして動けなくなった獲物の肉を貪り喰うモンスターである。



【第1話】

森林の奥深くで少女は尿意をもよおしてしまった。彼女は高校の卒業旅行でこの島を訪れている。まだまだ夏は先だが、それでもこの日は暑かった。ショートパンツと半袖 T シャツで歩いていたが、それでも汗が止まらない。ともに行動している2人の少女たちも同様に、汗ばんだ身体にときおり吹く風が涼しくて心地良かった。

ちなみにこんなところにトイレなどない。少女は仲間たちに

「ちょっとトイレ。ちょっと待ってて」

と告げて一人別方向へと歩き出す。そして人の気配がないのを確認しショートパンツとショーツを下ろすと、無毛の陰部が露わになる。少女はしゃがみ込んで放尿を始める。その雌肉の匂いに誘われて、背後から飛んでくる何かに少女は気づかなかった。

美味そうなお馳走の香りに食欲と狩猟本能を掻き立てられたその何かは、勢いよく獲物に飛びかかった。一瞬で捕らえられ倒れる少女。何が起こったのか理解する間もなく、口に棒状の何かを挿し込まれ、ピストン運動とともにドクドクと大量の液体を流し込まれる。

うめき声を上げながら暴れるも、身体はがっしりと掴まれ、上から押さえ込まれているので立ち上がれない。その間にも謎の液体は少女の口内へ注ぎ込まれていく。すると10秒もしないうちに少女は意識を失い、完全に脱力してしまった。

この少女を襲ったのはビードラゴンという名の捕食獣（イーター）であった。ハチとドラゴンとが合わさったかのような異様な姿をしたモンスターは、獲物の身体から衣服を剥ぎ取っていく。その鋭い爪のついた前足でブラジャーもショーツも破り捨てると、雌肉の陰部からはまだ尿が出続けており垂れ流しになっていた。

そして裸になった雌肉の尻に喰らいつく。柔らかい尻肉に

無数の鋭い歯が突き刺さり、喰いちぎる。臀部はたっぷりと脂が乗っており、喰いちぎった尻肉を美味そうに呑み込む。そして貪るようにそれを繰り返し、どんどんイーターの胃の中に送られていく。

脂肪の層の奥には大臀筋があったが、弛緩しているので程良い噛みごたえがありつつも柔らかかった。これでタンパク質が摂取できる。肛門の筋肉である肛門括約筋を喰いちぎると、とても引き締まっていた。そのまま直腸を引っ張り出そうとするも、大あごは恥骨にぶつかり邪魔される。

肛門より奥にある肉を喰うには腰の骨を先に砕く必要がある。喰らいつくとさすがに骨は硬い。が、この噛みごたえも心地良くあごの筋肉に快感がはしる。

バキバキッ！という音とともに恥骨は砕け、それまでも呑み込んでいく。

そして直腸を引っ張り出し喰いちぎり呑み込み、子宮も喰いちぎり呑み込んでいった。

美味しい。本当に美味しいご馳走にイーターは狂喜しながら食事を続ける。膀胱に喰らいつくと、中に残っていた尿がぶ

ちまけられ、噛みちぎり呑み込む。少女の腰の中はずいぶんと肉を失い空洞が露出する。

次に内側のもも肉にかぶりつき、喰いちぎり呑み込んでいく。ボリュームのあるもも肉もまた、たくさんの脂肪だけでなく、その内側に筋肉がついておりタンパク質も豊富。

太ももの肉もなくなってくると、骨が露出してくる。その付け根に喰らいつき、思いっきり引っ張ると片足が腰から外れた。そして啜えた片足をバキバキと音を立てながら、ゆっくり呑み込んでいく。獲物を裸にしたつもりだったが、靴下だけは足に残っていた。剥ぎ取るのが面倒だったのか、靴は落としたものの靴下はつけたまま呑み込んでいった。

もう片方の足も付け根から喰いちぎり、美味そうにゆっくり呑み込んでいった。本当に美味かった。ほんの数分で獲物の下半身を喰い尽くしてしまったイーターは、今度は獲物の大きな乳房に喰らいつく。脂肪なので当然柔らかく、大きいのでプニユッと口からはみ出る。あごに力を入れると、弾力のある乳肉は簡単にちぎれた。

汗ばんだ乳房を貪るように食していく。そして内臓も喰い

尽くし、腕も肋骨も脊椎もバリバリと砕きながら呑み込んでいった。そして最後に大きく口を開け、眠っているかのように目をつむる少女の顔・頭部を呑み込んでいった。それら獲物の骨肉が喉を通るたび、心地良い感覚がイーターを包んだ。

お腹いっぱいだった。体長2メートルのこのイーターからしたら、獲物1匹の身体は満足できる量である。腹を満たした捕食者ではあったが、まだ狩猟本能は駆り立てられたままであった。

食欲は収まったのにまだまだ獲物を襲いたい！という衝動が収まらない。本来狩りに使うはずの毒針がうずくのである。毒液は絶えず生成されており、いつでも狩りに使えるようにと用意されるわけだが、その毒液がある一定量ストックされるとこれを獲物の口内に放ちたいという衝動に駆られる。そうゆう身体構造になっていた。

近くにまだ他の雌肉の匂いがする。次の獲物を求めてイーターは飛び立った。

この島は古くからの自然が残っており、特に島の大部分を占める森は天然記念物も棲みついている太古の森。自然保護のため開発はほとんどされておらず、美しい景観が守られている。そのためこの島は穴場スポットとして若い女性から人気があり、海岸沿いにある町とも言えない町の宿には、場違いなぐらい女性客がやって来て賑わっていた。

宿と言ってもオンラインで予約し、1日1回だけ清掃員さんが必要最低限な清掃・ベッドメイキングなどをするだけの簡易的な宿である。だいたいの女性客はここで寝泊まりしてビーチで遊ぶか、森に遊びに行くか、本当は許可されていないがなしよで森の中でキャンプして楽しんでいた。

が、じつは行方不明者が多く出る森であることを彼女たちは知らない。お忍びで行き先を告げずここへ来る若い女性客も多く、仮に捜索願いが出されてもこの島で消息を絶っ

たことまで行きつかない。

時には団体客が忽然と消えてしまうこともあったが、宿で客の動向をチェックしているわけでもないため誰にも知られぬまま、謎の失踪事件となってしまう。

加えて電波が届かず、さらには唯一のアクセスである1日1回だけの連絡船も、乗客の人数など把握してはいない。とにかく、何か異常事態が起こっても他の誰かに伝わらない環境となってしまうていた。

イーターは洞窟の巣穴に棲んでいた。出入口から数歩奥へ進むと、突然下方向に大きくえぐれた形をした洞窟。高さ10メートルほどの大穴の底は意外にも陽の光が届き、洞窟のわりにはそこまで暗くはない。雨風を凌げる上、夏は涼しく冬は暖かい、とても良い場所であった。

そして大穴の底には若い女性の衣服が大量に散乱していた。だいたい夏服だが、よく見ると冬服・春服・秋服、いろいろなものがあり、ブラジャーやショーツといった下着も大量

に落ちていた。それら大量の下着や衣服は層となっており、ともすればフカフカのベッドのようでもあった。

そしてその上に意識を失った少女が1人、無造作に落ちている。寝ているというより、まさに落ちているといった表現に近い。そしてこの巣の主が何かを抱えて戻ってきた。コウモリのような翼で飛びながら、巨大なハチのような尻尾を持った姿。

そして抱えていた何かを巣の底へと落とす。大量の下着・衣服の上に落ちたそれは少女の身体であった。意識はなく完全に脱力し、失禁しており股間から尿が垂れ流しになっていた。

そして巣の底に降り立ったイーターは、少女たちの身体から衣服を剥ぎ取っていく。これらは獲物なのである。すでに毒針を獲物の口内に挿しこみ、神経毒である液体を注入し獲物の身体を弛緩させてある。おそらく彼女たちが意識を取り戻すことはない。

裸にしたご馳走の無毛の陰部を舐めまわす。あくまで舐めるだけ。今はもう満腹なので、その味を舌だけで堪能する。

そして2匹目も裸にすると、それらを保存食として下着や衣服の層の中へ埋める。

人の身体を隠せるほどの下着・衣服の量。この捕食者がどれほどの獲物を喰ってきたかが分かる。夏服が多いことから見ても、獲物は夏に多く獲れる。冬を越すにあたっては、おそらく多くの保存食を蓄えたのだろう。とにかく、餌には困らない環境が整っているようである。

2日分のご馳走を手に入れた喜びを感じつつ、イーターは眠りにつく。眠りながらかすかにあごが動く。夢の中でもご馳走の柔らかい尻肉や乳房を貪り喰っているのだろうか。

なお、人数を表記する際、
人間側からは「人」
イーター側からは「匹」
と表記する。



【第2話】

目が覚めたイーターは、さっそく保存食を1匹掘り出し裸の股間に喰らいついた。そして無毛の陰部を喰いちぎり呑み込む。それから肛門を中心に貪り喰っていく。夢中で喰らいつくたび、少女の大きめの乳房がプルンプルンと揺れる。

腰の肉がほとんどなくなると、ボリュームたっぷりの太ももを喰いちぎり呑み込んでいく。フライドチキンのようなジューシーな肉は本当に美味いご馳走であった。肉だけでなく骨までバリバリと食べていく。

下半身を食い尽くし、今度はおっぱいを喰っていく。脂特有の甘みが口の中に広がり、味わいながら貪る。おっぱいを食い尽くすと、そのまま肋骨をバキバキ噛み砕き、その奥の肺や心臓を喰っていく。残る内臓もなくなると、腕や

頭も含めすべて喰い尽くしていった。

満腹である。至福に包まれながらも、毒針がうずく。狩猟本能に掻き立てられ2匹目の保存食を掘り出すと、その獲物の口内に毒針を挿しこみピストン運動とともに毒液を注ぎ込んでいく。

すでにこの獲物は襲ったときに毒液注入で弛緩し動けなくなっているが、それでも執拗にピストン運動を繰り返す。じつはこの行為はイーターにとってとても快感が伴うのである。なので狩りのための武器でありながら、気持ちいいからやっている。

大量の毒液は獲物の胃の中と肺の中にも溢れ、ゴポゴポと口の外へと溢れ流れ出ていく。それでもピストン運動をやめないイーター。獲物は鼻の穴からも毒液が溢れ出し、目は半開きで白目を剥き出した。

この毒は神経毒。獲物の筋肉は弛緩し脱力する。しかし生命維持に関わる部分には悪影響はない。それどころか、何

も食べなくても健康状態が維持され何ヶ月も衰弱することはない。さらには免疫力も向上し、病にもかからなくなる。

正に獲物の身体を保存食にするために完成された毒液なのである。いつでも新鮮な雌肉が食べれるようになっている。さすがに肺の中まで満たしては窒息してしまうが、どのみちこの雌肉は明日には食べてしまうので問題ない。

ようやく満足したのか毒針を獲物の口から抜き、またも裸の獲物を舐めまわす。特にアナルを舐めまわした。しばらく舐めまわすとそれにも満足したのか、今度は獲物の身体を抱えたまま自分の身体も下着・衣服の層の中に埋めていく。まるで下着や衣服の土の中に潜っていくように。

ご馳走の匂いに包まれ、安堵の中またも眠りにつく。

ところ変わって町の宿。町と呼ぶには規模が小さいが、それでもこの島が好きな者たちがこの場所を支えている。この宿の実質的な仕事は1人の少女がすべてこなしている。

宿のオーナーはこの島にはおらず、オンライン予約で管理している。少女はその日の予約人数を確認し、1日1回清掃とベッドメイキングを行うだけ。少女はこのバイトだけで生活が出来ている。特にお金を使う場所もなく、使いたいものもない。なのでこのバイトの仕事が終わると、特にすることもなくのんびりと過ごしている。

たまに連泊すると思っていた女性客が戻ってこなかったりすることがある。キャンセルをしたのかも知れないし、勝手に予定を変更して宿に戻らず帰ってしまったのかも知れない。

が、彼女からしたらどっちでも良いこと。仕事が減るからいいや、ぐらいにしか思ってなかった。

少女の名前は渚（なぎさ）。この島で生まれ育った18歳。生まれ育ったと言っても、中学高校はこの孤島にはないので、ここから船で3時間のところにあるもう少し大きな島にある学校に在籍。小学校はもう、彼女が卒業すると同時に廃校となった。児童が少なすぎたからだ。

高校を卒業しこの島に戻ってきた。家族はいなかったが、ゆっくりと時間が流れるこの島の空気が好きだった。身長は平均的な女子。日焼けしにくい体質なのか、子供の頃から海でよく泳いでいたわりにそこまで日焼けしていない。ショートカットでスリムだが、バストとヒップはやや大きめ。その上、運動は好きなので程よく筋肉もついている。

またも連泊すると思っていた女性客が3人戻ってこなかった。宿の予約情報にて同い年ということは分かっていたので、記憶に残っていたのだ。「まあ、別にいいけど」ぐらいにしか思わなかったが、幼い頃に聞いた話をふと思い出した。

森の中には人を喰う怪物がいるらしい。若い女の肉が大好物らしい。森で女が行方不明になったら、それは怪物に喰われたということ。どこで誰から聞いたかも忘れてしまったが、そんな話をむか〜し聞いた記憶がある。まったく信じてはいなかったが、確かにあの深い森の中は何がいてもおかしくはなさそうな雰囲気ではある。そしてふと、

人の身体って美味しいのかな？

女の身体って美味しいのかな？

なんてことも考えた。そういえば今日来てた若い女性客、バストもヒップも大きかったな～。食べるとしたら、あ～ゆ～のが食べがいがあるご馳走なんだろうな～、まあ、私は食べんけど、なんてことまで思った。

渚はどこか、普通の人には考えないであろうことを考えることがある。もちろん人が何を考えているかなど確認のしようがないが、それでもどこかズレているように思われることがあった。怪物の視点に立って考える少女というのは、やはりどちらかと言えば少数派だろう。

次の日、目を覚ましたイーターは空腹であった。さっそく保存食を食べ始める。裸の少女の尻肉、そして股間と貪っていくが、やや小柄であったため肉の量が少し乏しく思え

た。胸にも齧り付くが、これも乳房と呼ぶには少し乏しく思える。そしてやはり早目に喰い尽くしてしまう。

美味しい、が、これではまだ喰い足りない。もっともっと雌肉を喰いたい。食欲と狩猟本能に駆られ、イーターは巣穴から飛び出す。そして鋭い嗅覚で雌肉の匂いを嗅ぎとり、獲物を求め飛び去っていった。

森の中で一人の若い女性がバーベキューをしていた。ソロキャンプというやつだ。女は腹出しタンクトップとショートパンツ姿で、ロングヘア。背は高く尻肉も乳房もたっぷりつついている。脂肪だけでなく筋肉もある。

彼女はハイボールを飲みながら、大きな骨付き肉を焼いていた。いかにもアウトドアが好きそうなタイプ。たくさん食べてたくさん飲んでたくさん動く、そんな雰囲気が伝わる。

こんなライフスタイルだからこそ、この身体が出来上がったのかも知れない。

焼き上がった骨付き肉に喰らいつく女。誰かに見られてるわけでもないし、好きに食べるぜ！と言わんばかりの豪快な食べっぷり。

噛みちぎった肉を美味そうに頬張りながら咀嚼し飲み込む。

喰らいつき、噛みちぎった肉を美味そうに頬張りながら咀嚼し飲み込む。それを繰り返し、時折ハイボールをゴクゴクと飲み干す。そして骨付き肉は短時間でただの骨になった。しばし恍惚の表情を浮かべる。

しばらくのんびりしていると、尿意と便意をもよおす。他に誰に見られているわけでもないが、この場所は少しだけ開けているので少し移動して深い木々の中でショートパンツとショーツをおろす。そして小と大を同時に始める。いつもたくさん食べてたくさん飲んでいるのであろう。たくさん出した。

心地良い余韻に浸る。自然と一体化したような、人がまだ野生に生きていた時の感覚のようなものを感じながら。普段は隠している陰部も尻穴も、外気にさらされていることに意識を向ける。空っぽになった膀胱と直腸に意識を向け

る。

そんな今の状態に快感を感じていると、突然何かが激突した。一瞬で押し倒された女は何が起こったのか理解する間もなく、口に棒状の何かを挿し込まれ、ピストン運動とともにドクドクと大量の液体を流し込まれる。

うめき声を上げながら暴れるも、身体はがっしりと掴まれ、上から押さえ込まれているので立ち上がれない。その間にも謎の液体は女の口内へ注ぎ込まれていく。すると10秒ほどで女は意識を失い、完全に脱力してしまった。



【第3話】

極上のご馳走を手に入れ、イーターは歓喜した。尻肉も乳房もたっぷりとした食べ応えのある獲物である。が、すぐには食べなかった。イーターは雌肉を抱え飛び立ち、そして巣穴へと戻ってきた。あまりに空腹でなければ、基本的には巣穴で食事をするようだ。

鋭い爪でタンクトップを破り捨てる。ブラジャーはつけていなかったため、大きな乳房がプルンと露わになる。下半身はすでに裸になっている。足に引っかかったショートパンツとショーツを剥ぎ取る。履き物は襲ったときの衝撃で脱げており、靴下は元々履いていなかった。

裸になった雌肉から美味そうな香り。そして大きく口を開け、その大きな尻肉に喰らい付く！